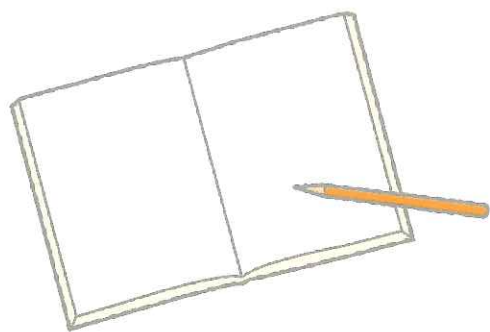


書いて学ぶ
親鸞のいじりば

お手本
を
なぞって

正信偈



「正信偈」とは

「正信偈」は、正式には「正信念仏偈」といい、浄土真宗の根本聖典である「教行信証」「行巻」の終わりに記されています。親鸞聖人が深い感動を持って受け取られた、本願念仏の教えを親しみやすい偈頌の形式で書き記され、私たちにお伝えくださったものです。七文字を一句とし、六十行百二十句からなっています。真宗門徒が朝夕のおつとめに用いている、親鸞聖人のお言葉の中でも、もつとも親しまれているお聖教の一つです。

その要点を一言で述べると、「いのちの依りどころをたまわったことへの感謝」ということです。

「正信偈」の冒頭には、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の二句がおかれています。これは、親鸞聖人が、生きる依りどころを発見したよろこびの表現ともいべきものです。このよろこびを与えてくれたはたらきを、感謝の念とともに尋ねていかれたのが「正信偈」です。

本書の使用にあたって

本書は、親鸞聖人のおことばに直接ふれ、学んでいただくことを目的としています。各頁は、「正信偈」の本文(漢文)と、書き下し文、語注、現代語訳からなります。まず、語注と現代語訳を参考にしつつ、漢文と書き下し文の意味を確認しましょう。そして、意味を考えながら、ペンまたは鉛筆で、漢文と書き下し文をなぞります。書き終えたらぜひ声に出して読んでみましょう。はじめて仏教の教えにふれる方は、ことばの難しさにとまどいます。漢文と書き下し文を何度も声に出してゆったり読むことで、きつと親鸞聖人のお心にあつていくことができると思います。

なお、漢文と書き下し文は「真宗聖典」(東本願寺出版発行)に拠っていますが、漢文の読み方は、おつとめの読み方にならない「真宗大谷派勤行集」(同前)に拠っています。

語句の意味

歸命／南無

南無は梵語ナマス(原義は屈する、心を傾けるの意)の音訳語で、体を折り曲げて歸依・敬礼を表すことを指します。歸命はその意識語で、命をあげて仏に歸依すること、あるいは仏が教え命ずることにしたがうことをいいます。

無量壽

量ることができない仏の壽命のこと。悩める人がいるかぎり決して捨てず、どこまでも救いつてやまない仏の慈悲を表します。

如来

真理(如)から来た者、現れ出た者の意で、仏のこと。仏(仏陀)は梵語ブツダ(目覚めた者の意)の音訳語。

不可思議光

光は、迷いの暗闇を照らすさとり智慧を表します。いつでもどこでも、私たちの思いを超えて迷いを照らしてくださるので、思議(思いはかる)することができない光といわれます。

法蔵菩薩／世自在王仏

「法蔵菩薩」は、阿彌陀仏が仏となる前、菩薩(さとりを求めて修行する人)の地位にあったときの名。世自在王仏は、法蔵菩薩の師(コラム1本書一四頁参照)。

歸命無量壽如来

南無不可思議光

法蔵菩薩因位時

在世自在王仏所



無量壽如来に歸命し、

不可思議光に南無したてまつる。

法蔵菩薩の因位の時、

世自在王仏の所にましまして、

現代語訳

量りしれない壽命をもった阿彌陀如来に歸依し、人間の思いを超えた如来が放つ光に歸依いたします。阿彌陀仏は、仏となる前、法蔵という名の菩薩として、師である世自在王仏のみもとで道を求めておられました。

観見諸仏浄土因

観見 とくけん
よく見ること。観は、睹の異体字で、見る、視線を集中してよく見るの意。

国土人天之善悪

浄土 じやうど

仏がお住みになる場所は、仏のさとりによってつくられているきよらかな世界であるから浄土といえます。それに対して私たちが住む場所は、煩惱ぼんのうによってけがれているから穢土えいどといえます。

建立無上殊勝願

無上殊勝 むじやうしゆじやう

この上なく特に勝れていること。

願／大弘誓 がん たいくげい

願とは本願ともいい、仏になる前、菩薩として修行中のときに立てられた願いのことで、必ず成し遂げようと誓うので誓願ともいいます。またすべての人々を救いたいという、広大なる願いであるので、弘願、弘誓、弘誓願、大弘誓等ともいいます。法蔵菩薩は、さまざまな仏の世界や人々の行いを見て、念仏一つによってすべての人々を救いたいと願われましたが、その願いを四十八の願として選択され、この願が成就しなかつたら決してさとりさとりの身とはならないとお誓いになりました。

超発希有大弘誓

書き下し



諸仏の浄土の因

国土人天の善悪を観見して、

無上殊勝の願を建立し、

希有の大弘誓を超発せり。

現代語訳

世自在王仏のみもとで法蔵菩薩は、もろもろの仏の浄土の成り立ちと、さまざまな国土とそこに生きる者たちの善悪を見きわめられました。そしてすべての人々を救いたいという、この上ない特に勝れた願いを立てて、かつてない広大な誓いを、世間の常識やさまざまな困難など、あらゆることを超えて発されました。